

中国図書館探訪記

—首都図書館編—

中国語学科 竹内 誠

1993年夏、筆者は、おりしも北京語言学院で一ヶ月半の中国語教員のための研修を受けているところであった。ちょうどよい機会なので、この目で確かめておきたい資料を閲覧しようと思い立ち、首都図書館へ行くため、タクシーに乗り込んだ。行き先をいう前に、「国子監、国子監」と、中国語でつぶやいてみた。目指すは、雍和宮のそばにある「国子監」。中国人の先生から、「国子監」の最後の文字、「監」のアクセントを第一声（フラット）ではなく、第四声（下降調）で発音しないと、タクシーの運転手には通じないよ、いわれていた。その甲斐あってか、無事到着。「国子監」とは、古くは教育をつかさどる機関のことで、一般には「孔子廟」（中国語では「孔廟」）で通っている。立派な正門をくぐり、なかにはいると、年代を感じさせる平屋の首都図書館があった。それもそのはずで、20世紀初頭に建てられ、魯迅といった名だたる知識人たちが通っていたといわれている。当時のこととて、館内には、エアコンなど、もちろんなく、大きな扇風機が天井でゆるゆる回っているだけだった。閲覧室は、昼間なのに、薄暗く、自習中とおぼしき学生が大多数を占めていた。お目当ての資料を閲覧することは許可されたが、但し、一時間以内に返却しないと駄目だという。せっかく日本からはるばる来たのだから、と泣きついたが、「規則だから」といって、とりあってくれない（余談ながら、最近は事情が変わり、結構、泣き落としがさくようになった）。仕方がないので、日本から持参したコピーと、件の資料を照らし合わせ、異同の調査を始めたが、幾ばくも進まないうちに、タイムアップ。こんな調子でいったら、いつになれば、校合し終わるのか、暗澹たる気持ちで、首都図書館をあとにした。その後、ありがたいことに、資料のコピーをさるルートから入手できた。その経緯については、別の機会に譲る。それから、歳月は流れ、首都図書館は、2001年、東三環路の南、すなわち北京最大の骨董市場がある潘家園の近所に引っ越した。12年ぶりに訪れた首都図書館は、図書館らしからぬデザインに面目をすっかり一新していて、かつての面影などどこにもなかった。地上8階、地下1階の規模の図書館は、筆者の知るかぎりでは、ほかにない。館内は、明るく、ゆとりを持って設計されており、空いたスペースには、オブジェや絵画が飾ってある。妙な表現かもしれないが、非常に中国的ではない、ということだ。入館手続きは、ほかの図書館と同じなので、割愛する。北京地方文献閲覧室が設けられていて、北京に関する文献の充実ぶりは、国家図書館さえも凌ぐ。必要があって、「益世報」という辛亥革命直後、北京で刊行された新聞を見ようと思い、請求してみた。通常、こういった刊行物は、マイクロフィルムか復刻版が閲覧に供される。ところが、手袋をした職員が不用意に扱うとたちどころに破れそうなオリジナル版を、もって出てきたのには、驚いた。昔のような、ことさら厳格なものも困るが、このようにオープンなものも、如何なものか。もうひとつ驚いたことがある。かつて、ひとときの面会が許された例の資料を見ようと思い、請求するため、コンピュータ端末で検索してみたがでてこない。念のため、備え付けの書名、著者カードもそれぞれ繰ってみたが、やはり出てこなかった。その理由は、今もって謎である。

たけのうち まこと（教授・中国文学）